３　令和２年度・研究の成果・課題

（１）児童の成果

① 造形的な見方や考え方の素地づくり

・題材の中で着目する視点を提示・明示するとで，児童の中にも造形的な視点で対象を捉えようとする姿が見られた。

・表現及び鑑賞の相互に関連させた授業展開を図ることで，「形や色，イメージ」を自分の思いに合わせて工夫して表現することの面白さに気付き始めている。

② 主体的な学び

・多くの材料の中から自分のイメージに 合うものを選ぶ経験を積むことで，自分のイメージを表現できることへの喜びを感じ，新たな表現意欲を引き出すことができた。

・授業後の振り返りカードなどでは，「自分の思っていた色に塗れてうれしかった。次は違う色にも挑戦したい。」「今度は〇〇さんの材料の使い方をまねしてみたい。」などの感想が見られた。

・ICT機器を活用することで，失敗を恐れず何度もつくりかえる経験を重ねることができ，自分の思いを，表現する主体的な学びへとつなげることができた。

③ 対話的な学び

・活動途中などで互いの作品を鑑賞し合う時間を設けることで友達の製作した作品からヒントを得て，自分の作品に生かすことができた。

・共同作品を製作する活動からは，児童同士が話し合う時間を多く設けることができ，自分一人ではできない発想に結びつく喜びを感じることができた。

・製作途中で手を止めている児童に対しても自分の思いを引き出す声かけや思考の共有をすることで，徐々に手を動かしていく姿も見られた。ものをつくる活動の中での児童対児童，児童対教師，児童対作品との対話が，自己の思いを具現化する手段ともなっていった。

④ 深い学び

・「形や色，イメージ」などの造形的な視点から対象を捉え，感性や想像力を働かせ，自分のイメージしたものを表現する「造形的な見方・考え方」を育むことで，児童は優劣を感じず活動に集中することができた。

・「つくり・つくりかえ・つくる」学習過程を繰り返すことで「深い学び」を体得していくことにつながっていった。

⑤ 表現する喜びの自覚・共有

・表現したものを交流させる経験を通し，その違いのよさに気付き，自分の作品に対する新たな気付きを与えられることで，より自分の作品への愛着をもつことができた。

・自分の思いを表現する楽しさに加え，だれかに見てもらい，受け入れられる経験が，さらなる表現する喜びの自覚・共有する姿へと発展していった。

（２）教職員の成果

① 造形的な見方や考え方の育成を目指して

・本校児童の図画工作科における長所・短所を全教職員で把握し，児童の実態に応じた題材の提示やカリキュラムマネジメントの工夫に生かすことができた。

・「表現内容」，「表現材料」，「表現方法」を適切に選択し，豊かにかかわらせる過程を経て，児童は表現したい自分の思いを明確化することができた。

・児童の実態を把握し，自分の思いの実現に向けた主体的な学びが展開されていく授業を目指すことで，造形的な見方や考え方が育まれていくことを感じることができた。

② 主体的・対話的で深い学びへつながる題材構成の工夫

・表現や製作の過程，児童一人一人の思いや考えを大切にすることを意識した授業展開を図ることを全教職員が目指した。

・興味関心が継続する題材構成や，児童が出会う材料や素材，活動場所や環境，友達とのかかわりを意識した教材研究の充実を図った。教職員も児童と同じ製作をすることを通し，一度構想したものでも実際に表現することの難しさや，材料の持つ形や色，感触から広がるイメージを形にしていく奥深さを感じることができた。

・相手との対話が，自分の作品を認められる内容であれば，より自分の作品への愛着がわき，新しいものを創造する力へと変わっていくことが大切であることを実感した。その経験が，授業の中での児童の賞賛やアドバイスにつながり，一人一人のよさを認めることへ自然とつなげていくことができた。

・児童が互いのよさを認め合いながら「つくり，つくりかえ，つくる」学習過程を繰り返すことのできる学習環境を整えることが，図画工作科の学びの中でも大切であった。

・苦手意識を持つ児童が，失敗への恐れや自分の作品への自信のなさを少しでも軽減することができるような，温かな学習環境作りも大切であった。

・図画工作科の各領域「A 表現」「B 鑑賞」の関連を図った指導展開を積極的に取り入れ，自分の学びを見つめ，深化させていこうとする経験が，児童にとっての深い学びにつながっていくことを，授業実践から捉えることができた。

③ 表現する喜びの自覚・共有を意識化する評価

・表現したものを共有するために有効な手段の一つがICT機器の活用であった。発想や構想，材料や素材の選択や組み合わせといった製作過程の様子は，適宜大型テレビとつなげることで，共通理解を図ることができた。

・タブレット端末に写真や動画として保存することにより，児童の変容や学習後の評価をその都度振り返ることができ，PDCAサイクルが円滑に進められる一方策へとつなげることができた。

・発達段階に応じた工夫や，付箋を使う相互評価を取り入れた振り返りカードも，児童の表現や活動を見取り，さらなる表現欲求に応じた指導につなげるため大切であることも再認識することができた。

（３） 課題

・豊かな発想を支える確かな技能を身に付けさせていきたい。

・図画工作科における材料や用具を系統的に扱うことができるようなカリキュラムマネジメントを工夫し，自分の思いを表現に生かすことのできる造形的な成功体験を重ね，学びの深まりを期待したい。

・感じたことや思ったこと,考えたことなどを言葉で整理し表現する言語活動の充実を図りたい。

・児童のよさや可能性にあふれた作品を尊重する雰囲気づくり，相手のよさを心から認めることのできる感性豊かな言語活動が充実するよう，今後も研修を重ねていく必要がある。

（４） 令和３年度の研究主題と仮説

以上の成果と課題から，令和３年度は県の主題を受け，「造形的な資質・能力を高め，表現する喜びが互いに感じられる授業づくり」を副主題に掲げ，研究を進めることとした。また，主題・副主題に迫るための研究仮説を「児童がつくりだす形や色，作品にこめられた思いなどのもつよさを，互いに感じ合い，伝え合う授業づくりを行うことで，より豊かな造形活動が展開されるだろう。」とし，以下の３点を柱に具体的な取組の実践を推進することとした。

（５） 研究推進のための柱

①育成する造形的な資質・能力を明確にした指導計画の工夫

・指導事項の系統性を意識した題材や活動の設定

・成果や課題を次の実践につなげ，広げていく学びの展開を意識した授業づくり

②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

・自分の思いや考えをもつ（自己内対話）過程の重視

・「話し方・聞き方」の定着と豊かな言語能力の育成

・意見を効果的に交流させ，新たな知を生み出す場の設定

③表現する喜びの自覚・共有につながる評価の工夫

・成長を振り返ることができる環境の整備

・成長を感じることができる多様な評価方法

Ⅳ　令和3年度の実践

1　令和3年度公開授業記録・研究会記録（第3・6年）

2　全校取組

（1）技能到達度一覧表・スマイルこうぼう

（2）ことばであらわそう

（3）各学年の取組・支援学級授業公開

（4）スマイル班活動

（5）図工だより「スマイルこうぼうだより」の発行

（6）図工ファイルの活用

（7）図画工作科における指導のアイデア

（8）校内環境整備

（9）外部講師との連携